

身延山資料叢書 六

目錄集 六

身延山大学 東洋文化研究所

身延山資料叢書 六

目錄集 六

身延山大学 東洋文化研究所

目次

序……………2

日莛筆『靈寶目錄』……………9

序

身延文庫典籍資料の概要については、『身延文庫典籍目録』全三卷（上・中・下、二〇〇三～〇五年）として身延山久遠寺より刊行されている。

本巻に収録した身延山久遠寺第二十九世日蓮筆『靈寶目録』（二冊）は、山梨県南巨摩郡身延町の身延山久遠寺内にある身延文庫に所蔵されている。本書影印は原本保護の側面より一部に不十分な箇所もあるが、了とされた
い。

本巻で扱う日蓮筆『靈寶目録』の書誌情報は左記の通りである。解説にあたり、筆者である日蓮および本書の内容について、身延山大学東洋文化研究所主任 木村中一が担当した。

身延山久遠寺第二十九世日蓮筆『靈寶目録』一冊

- ・ 法 量（全体）二二八・七×二〇・八／（題簽）一九・五×三・五
- ・ 架蔵番号（部）歴代部 第廿九世／（著者）日蓮／（號）1／（冊）1
- ・ 署 名 「靈寶目録」

※本巻には身延文庫所蔵本修補作業時（時期不明）に新たな表紙が付された。本巻においてこの新表紙を「表紙」、元表紙（「御書目録」部分）を「御書目録表紙」、また元表紙（「寛文八年檀那中奉納覚」部分）を「奉納覚表紙」と表記する。

日蓮について

身延山久遠寺第二十九世隆源院日蓮（一六〇九〜八一）以下、日蓮と略記す）は、元々は「日延」と称していたが、身延山久遠寺に晋むにあたって身延山久遠寺第十世観行院日延と同日号となることより「日蓮」と改めたという（「えん」の字を「蓮」もしくは「筵」と書く場合がある。本論においては「筵」にて統一する）。

日蓮は慶長十四年（一六〇九）に京都の商家七織屋にて生まれ、幼くして鳴滝三宝寺の中正院日護について得度し、十八歳にして徳川家康の側室、養珠院お万の方・前田利家の側室、寿福院千代保の外護を得て下総中村檀林にて修学することとなる。その後、小西檀林へと横入し、若干三十歳の若さで小西檀林第十一世の化主に晋むと檀林の興隆に勤しみ、その大業により中村檀林第十世ともなる。その後、正保四年（一六四七）には通心院日境の推挙をもって玉澤妙法華寺第十九世となり、明暦元年（一六五五）には京都妙顕寺第十七世となって五重塔や七面社を造営するなど活発な寺院運営を行ったことという。

寛文七年（一六七七）身延山久遠寺第二十九世に晋むと思親閣や祖師堂、さらに拝殿などを再建し、日蓮聖人真蹟遺文の修補や狩野元信筆画の修繕保管などをはじめとする什物霊宝の修復保管にも尽力した。さらに身延山において資糧乏しく、やむなく閉講・中断していた身延西谷檀林を再興し、寛文九年（一六六九）には大講堂を建立した後には衆寮や食堂なども建設した。また下総中村檀林の化主であった興源院日遼を第八代化主として請じて西谷檀林の復興にも尽力したという。

寛文十三年（一六七三）三月二十八日、六十四歳となった日蓮は寂遠院日通に後を譲り、京都紫野に隠棲することになる。しかし延宝七年（一六七九）に先の日通が遷化するや身延山久遠寺の後継問題が勃発し、飯高檀林の一円院日脱を推挙する派と、慣例にならない選挙を行うべきであるとする派の両派に分裂することとなる。日蓮は両派を調停せんと江戸に下向し、奏者番兼寺社奉行であった板倉石見守重種と対するに至って、日蓮が「隠居

の身でありながら諸寺院の例なき新法を企て、混乱を生じさせること罪深し」となってしまう、十月四日に秋田藩佐竹右京大夫義処の預かりとなってしまった。既に日廷は七十一歳の高齢であったが秋田の安楽寺へと配流となり、ここにあること三年、天和元年（一六八一）正月二十七日、七十三歳をもって遷化することとなるのである。

「御書目録」部分の書誌学的考察とその受容

本『靈寶目録』は全二七丁からなり、その構成をみると形状の違いにより「御書目録」（一丁ヲ〜一五丁ウ）と「寛文八年檀那中奉納覚」（一六丁ヲ〜二七丁ウ）の二書が合本されたものであることがわかる。

まず、「御書目録」部分をみると「御書并御聖教目録」（全一一丁）とあり、日蓮聖人真蹟遺文や諸経要文、さらに諸典籍などが全十三函に納められていたことがわかる。周知の通り、身延山久遠寺は明治八年（一八七五）の身延大火によって全山焼失しており、多くの真蹟遺文もまた焼失した。本書によって身延山久遠寺に『立正安国論』および同『送状』が存在したこと、また『新尼御前御返事』などの真蹟が曾て保存されていたことがわかる。山川智應氏は『日蓮聖人研究』第二巻において、この「御書目録」部分を「御書并御聖教目録」として活字化しており、その前文には、

左に掲ぐる「御書并御聖教目録」は、身延山第廿九世隆源院日筵師（聖滅四／〇〇寂）の筆にかかる。身延山寶藏には、意師以下乾師・遠師・奠師・筵師・亨師の目録あり、意師の目録は御筆のみに限り、終りに師の所持の寫本御書を載せてゐる。乾師・遠師のものは御本尊類をも載せ、奠師のものは御本尊類に限り、筵師のものは「御書并御聖教目録」とあつて、御本尊類は載せられて居ないが、注目すべき記事が少からずある。例せば『大田禪門許御書御草案』とある如き、『波木井殿御書代筆也』と記せるが如き、また日意師の目録と多少の出入あるが如き、みな考究に値すべき貴重なる文献である。今は故別枝智救居士の謄寫に依る。

とあり、真蹟遺文の題名表記から考察されるその内容や、日意目録（『身延山資料叢書』第二巻目録集二収録）に収録される典籍との比較より、当時の身延山久遠寺における真蹟遺文の状況などを考察するため、本書は貴重な資料であると指摘している。

また山上弘道氏は「『延山録外』所収『唐鏡』について（その一）」、「同（その二）」において、山川氏の活字版を利用して『唐鏡』に関して考察を加えている。山川氏は「『延山録外』所収『唐鏡』について（その一）」において、

『唐鏡』は日蓮とほぼ同世代の藤原茂範の著作であることは、『本朝書籍目録 仮名部』に「唐鏡十卷（茂範卿抄）」とあることによつて知られるが、その成立年代などに諸説あり、これまで種々議論がなされてきた。

しかるにその議論には、ほぼ同世代の日蓮が、『唐鏡』を要文ながら筆写していたという事実が欠落していたのである。

とあり、『唐鏡』の成立年代研究において日蓮聖人筆の『唐鏡要文』が長らく外に置かれてきたと指摘している。そして聖人筆『唐鏡要文』の概要とその存在によつて得られる、『唐鏡』成立などに関する新知見に本書が資料の一つとして使用されているのである。先にも述べたが明治八年の大火によつて多くの典籍は焼失してしまった。聖人筆『唐鏡要文』もまた焼失しており、かつて『唐鏡要文』が身延山に存在したと実証するのが本書なのである。実際に本書をみると第十三函に「一、唐鏡・史記抜 一冊」とあり、山上氏はこれが『唐鏡要文』の初見であり、以降身延山久遠寺第三十三世遠沾院日亨の『西土藏寶物録』にも引き継がれていると指摘している。このように山川氏も指摘しているように本書は「考究に値すべき貴重な文献」であるといえよう。

『靈寶目録』にみる日蓮時代の典籍修補と受納の様子

身延山久遠寺身延文庫には様々な目録が所蔵されており、様々な情報を現在の我々に教示している。本書もま

た『靈寶目録』として当時の状況や事項を示してくれているのである。それらをここではみてみたい。まず「御書目録」部分の次に収録されているのが寛文十二年（一六七二）に行われた御書などの修理の様子を示す「寛文十二年御書修飾之事」である。

「寛文十二年御書修飾之事」によれば、事の興りは京都に住む佐野喜太郎昌長が寛文八年秋に身延山に詣でて靈宝を悉く拝覧したことに始まる。時に靈宝の多くは表装などに汚損があり、このままではと禁裏表具師であった中尾七郎兵衛雅克、同経師の濱岡次左衛門貞直など三、四人で寛文十年（一六七〇）秋より修補を開始したという。二年にわたる修補の結果、寛文十二年（一六七二）春には都合一三二軸の修理装飾が完了したという。「寛文十二年御書修飾之事」には寛文十年からの修理の興りや様子などを現代に伝えるだけでなく、この成就により当時の身延山久遠寺貫首であった日菟が新たに目録を記したものが本書であり、この新誌由来もわかるのである。またさらに「御書目録」の最後には「右函数全十三箱巻数全一百三十二軸也」とあり、先の修飾が都合一三二軸と合致することから、本書「御書目録」に記される御書全てがこの時に修飾されたことがわかるのである。また次に述べる「小手鏡」の前に「高橋入道御消息」と「中務左右衛門尉殿御消息」が記されており、これを入れると修飾された御書が一三四軸となることより、この二書は（修飾の必要がなかったためか）修飾されることなく、また一三箱の中に入れられることはなかったのではないかと思考される。「寛文十二年御書修飾之事」の後には先にも触れた「小手鏡」として久遠寺歴代の書状や行学院日朝本尊、さらには「都鄙一致勝劣和睦之書物」や「同添状」が記載されている。さらにその次には「大手鏡」として「信玄書物」として武田信玄、「信君書物」「不白書物」「光悦状」として穴山梅雪の書状や本阿弥光悦の書状などの記載があり、さらには先師御讓状や日朝筆「身延山由緒等之事」も記載されている。

これらの後には「寛文八年檀那中奉納覚」がある。これは前述の通り、これ以前のものとは大きさが異なり、全体的に一回り小さい。つまりこれからも本書が装丁されるにあたって合本されたのではないか思考される。さ

て「寛文八年檀那中奉納覚」は元表紙に「寛文八戊申年九月吉祥日／檀那中奉納覚／日蓮（花押）」とあり、日蓮代において受納した品々が、奉納者の名とともに記されている。その一端をみると「一、御經三十六部 女院様御内 宰相殿」とあり、御經（妙法蓮華經であろう）三十六部が女院内宰相より奉納されたことがわかり、また本間氏女仙壽院より御經一部が奉納されたともあり、この仙壽院の奉納した御經は金欄表紙の箱入であったという。これらを見ると仏像などの奉納もあったようで、他には長刀や刀脇差なども奉納されたことを知ることができる。さらに奥院権鐘も奉納されており、これは觀受院日順（法号か） 渋谷又左衛門（浄林日清）など五名よりが施主となり奉納されたことがわかる。「寛文八年檀那中奉納覚」末には「日通代寄附之覚」（元裏表紙見返し部分）があり、日蓮の次代である寂遠院日通の代に寄附されたであろう絵馬などの記載がある。残念なことに、この部分は欠けており、その全容を知ることができない。

結 言

以上、日蓮筆『靈宝目録』についてみた。既に述べたが日蓮は寺院運営に長けるだけでなく、教学興隆面においても尽力した歴代であったといえる。しかし晩年は後継問題により配流となり秋田にて遷化することとなるが、身延山中におけるその活動や功績は輝かしいものであった。前述の山川氏や山上氏が指摘していることからわかるが、それにもまして本書は当時の身延山内における靈宝格護の様子を知るだけでなく、日蓮の業績などを知ることができることから大変貴重な資料であるといえよう。

【木村中一記】

本書を収録刊行するに当たっては、所蔵者である身延山久遠寺御当局のご理解とご許可を賜った。また身延文庫及び宝物館の関係各位には、原本の調査に特別のご高配を頂いた。記して感謝申し上げます。

日莛筆『靈寶目錄』

身延山資料叢書 六 目錄集 六

平成二十八年三月三十一日 発行

編集（本卷担当）

身延山大学東洋文化研究所 木村中一

発行所 身延山大学 東洋文化研究所

〒四〇九―二五九七

山梨県南巨摩郡身延町身延三五六七
TEL (〇五五六) 六二―〇一〇七